

琉球大学学術リポジトリ

日本語を内破する：
又吉栄喜の小説における「日本語」の倒壊

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学法文学部 公開日: 2007-11-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 新城, 郁夫 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/2405

日本語を内破する

— 又吉栄喜の小説における「日本語」の倒壊 —

新城 郁 夫

1 「沖繩で日本語の小説を書くこと」の政治性

近現代における沖繩文学の歴史的展開のなかにおいて、日本語を書く、と言う行為は、「自然」な行為では、決してなかった。単純化を恐れずに言えば、日本語を書くという行為は、ある種の強迫であったし、また、ある種の夢のようなものでもあった、とも考えられる。日本語は、それを獲得することによって、はじめて近代を生き得るという手段であるばかりではなく、それ自体が同時に目的でもあった。その意味で、近現代沖繩において日本語を書くという行為は、国民国家生成のプロセスに参入するための極めて重要な政治的意味を持っていたと言えるだろう。

沖繩において日本語を書く、という行為にまつわる政治性を考えようとするとき、戦後沖繩の代表的作家である大城立裕の次のような言葉のなかに、その分裂的かつ矛盾に満ちた「夢」と「強迫観念」を読み取ることができる。

よい標準語のためには、とは柳宗悦も方言論争で言っている。日本語標準語のよりよい完成のために、方言が

役立つはずだ、と言った。ということは日本語の表現領域を広げるために、また同じ意味でもよりよい語感のものを、方言から選ぶ、ということにはほかなるまい。

ほんの一例だが、沖縄の国体を「若夏国体」と私たちは名づけた。「若夏」とは、オモロ語であるが、今日、沖縄本島では死んで、先島地方で生きている。これを国体に名づけることで、この言葉を日本語に加えようというのが、私たちの野心であったのだ。このような試みを、より多く沖縄の作家はすべきなのだ。雪国で生まれた「なだれおちる」という言葉が亜熱帯人の私たちにも使われているように、私たちの風土でうまれた言葉を、言葉を持つものとして日本語に加えようというのである。

大城立裕 「沖縄で日本語の小説を書くこと」(『沖縄、晴れた日に』家の光協会刊、一九七七刊収録)

大城立裕は、極めて早い段階から、自覚的に、沖縄語を自らの小説表現のなかに組み入れる試みをしてきた作家である。その大城において、しかし「沖縄方言」は、「日本語の表現領域を広げるため」という目的においてのみ承認されていると言えるように思える。「日本語標準語のよりよい完成のために、方言が役立つはずだ」という言葉に見出されるのは、沖縄において日本語で小説を書くという行為のなかにおいては、「日本語」という表現領域が、極めて強固な規範となつて政治的に機能しているということにはほかならない。そうした政治性を、多様な言語の並存的混淆といった「多文化主義」的樂觀によつて隠蔽してはならないだろう。近現代沖縄文学において、「日本語」は、極めて排他的に自らの中心性を構築してきたと言ふべきであり、そうしたプロセスは、「日本語」を唯一の言語的規範として内面化していくような、「沖縄人」自身の自己検閲によつても規律化されてきたと言ふべきだろう。そうした日本語の統制のなかにおいて、沖縄語の役割とは、いわば、日本語という中心を補完する周縁文

化としてのみ、承認され許可されてきたと言えるかもしれない。その意味で、先に引用した大城の言葉に露呈しているのは、「日本語」という基準の内部において、沖縄方言がいかなる周縁的貢献をなし得るかという、反転された承認欲求であるとも見なし得るだろう。

だが、こうした大城の言葉を、単なる同化志向といつて批判して切り捨ててしまうことにあまり意味はない。むしろ、こうした大城の言語認識のなかにこそ、沖縄において日本語を書くことにまつわる権力関係の痕跡が刻印されているとも言えるはずである。その意味で、私たちはここで大城の言葉のなかに、日本語という規律が、暴力的に表見者の「内面」を創造しこれを拘束していく過程を読み取っていく必要がある。そのうえで、ここで求められているのは、「沖縄で日本語の小説を書くこと」にまつわる抑圧が、「日本語標準語のよりよい完成」という「夢」に昇華されようとするその時に、「日本語」自体がその政治性を問われるという反転する言葉のプロセスを発見していくことである。こうした「沖縄で日本語の小説を書くこと」にまつわる転倒を考えていくうえで、又吉栄喜の『ジョージが射殺した猪』（一九七八年三月号「文学界」初出）は、特に重要な思考の契機を提示している小説と言えるように思える。

大城立裕の後続の作家として、又吉栄喜は「土着」的沖縄を描く作家として広く知られている。しかし、その又吉の初期小説においては、むしろ、ポストコロニアル的暴力が発動され続けている場所として沖縄を捉えるというラディカルなまなざしが、そのテキストの特徴をなしている。とくに、『ジョージが射殺した猪』にはそうした特徴が顕著である。

ベトナム戦争下の沖縄における一人の下級米兵の混乱した意識と身体を、沖縄の老人を「猪」に見立てて射殺するに至る過程のなかに表現している小説が、又吉栄喜の「ジョージが射殺した猪」であるが、この小論で注目した

いと考えているのは、軍事支配を実行する「ジョージ」という一人の占領米兵のなかの不安と恐怖を、日本語による内面独白といういつけん矛盾した方法で提示していくこの小説の言語的実験の政治性である。戦後沖繩を、東アジアにおける植民地主義的暴力の継続という政治のなかに問い直している小説として又吉の「ジョージが射殺した猪」を読み解いていくとき、看過されてならないのが、このテキストの全てが、細部にいたるまで日本語で書かれているという点である。そのいつけん当然と思われることが、極めて矛盾に満ちた言語的抗争を読者に突き付けてくるといふ事態のなかに、「沖繩で日本語の小説を書くこと」の逆説的な試みがみいだされてくるだろう。

2 「他者の言語」としての「日本語」

小説「ジョージが射殺した猪」において、下級米兵である主人公「ジョージ」は、迫り来る戦死への恐怖のなか、沖繩人女性へのレイプの強迫と米兵仲間達から暴行をうける日々の混乱した意識を内的独白という形式において語っていく。しかし、そこで「ジョージ」の内的独白はその全てが「日本語」によって翻訳されている。より正確に言うならば、翻訳という指標や前提もないままに、ただ日本語によつてジョージという一人の米兵の内的独白が覆われ、そしてテキスト全体が日本語によつて表出されていくのである。暴力的なまでに単一言語主義的に、日本語による支配がテキストを覆っているのが、この小説の特徴であると言えるだろう。しかしその一方において、この小説においては、彼を囲い込んでいく沖繩人たちの語る「日本語」および「沖繩語」は、「ジョージ」には決して聞き取ることのできない不気味な騒音（ノイズ）としか感知されず、小説の中で「翻訳」されることはない。ただ空白となつて投げ出されている。つまり、この小説においては、「日本語」は、徹底して「他者の言語」としてのみ

提示され、そして決して埋められること無い空白となつてテクストの表層に滞留するばかりなのである。

たとえば、次に引用する場面には、ベトナム戦争時において、米軍アジア侵攻前線基地であつた沖繩における、人種、階級、ジェンダー・セクシュアリティをめぐる暴力的支配関係が描かれているが、そこでいつけん透明性を確保しているかに見える「日本語」の政治性が、極めてアレゴリカルに提示されてくる。

トイレの周辺で女達たちがざわめいた。ワシントンがズボンのバンドをしめながら出てきた。マスターはすぐワシントンに近寄り、談合を始めた。両目がとろんとしたワシントンはまともにマスターをみず、めざわりだといわんばかりにマスターの顔をグロープのような手で押した。マスターはよろめき、シートにつまずき、フロアに尻もちをついた。ワシントンは夢遊病者のようにドアをあけ、外に出た。ジョンが捨てゼリフをはいた。なんであんなに騒ぐんだ、たかがいたずらぐらいで、敗残の劣等者のくせに。ジョージはトイレを見た。仲間の女たちに囲まれ、強姦されらしい女はうすぐまっていた。無言だった。死んだのかなとジョージは思った。(山男) たちがしきりに女をよんだ。何をしているんだ、早くすわれ。ジョージはあわててジョンたちを追い、外に出た。熱気がむつと来きた。マスターらしき者の大声が聞こえた。ジョージはふり向かなかつた。ののしられている気がする。沖繩方言らしい。あの語気あの語調はたしかにののしっている。マスターは逃げの準備をしながら、こぶしをふりあげ、歯ぎしりをしているだろう。しかし、ホステスたちはあの(山男)たちに群がっているにちがいない。ののしりの余韻はながくジョージの耳に残った。

殺気だったこの場面のなかの会話において、物語内容のレベルにおいては、日本語は一切使われていない。使わ

れてる言語は、英語と沖縄方言だけのはずである。しかし、その再現に当たっては、日本語だけが使用されている。つまり、日本語は表象の上で全てをカバーしているにもかかわらず、物語内容レベルにおいては、あらゆる実体を奪われているのである。むしろ、その透明化された翻訳手段としてのみ、読者の前に「日本語」が提示されていると言ふべきである。つまりここでは、日本語が排除されているという言語的動態が提示されるためにこそ、日本語が表記言語として用いられるという背理が見出されるのである。

ここにおいて、「沖縄で日本語の小説を書く」という行為における、虚構性とその虚構性に反映される日本語の政治性が、露呈されてくることに注目しなければならない。登場人物達が口にすることもなければ、その言葉で思考することもない日本語が、小説の全体を覆い尽くしているという奇妙さ。むしろ、この奇妙さの露呈を、極めて意識的に読者に想起させる契機として、この場面において米兵たちが語る「日本語」があるとと言えるかもしれない。それと同時に、「日本語」となつて発話されたかも知れない「沖縄人」による「さわめき」や「ののしり」が、それと察知されながら決して聞き取られることのない言語の痕跡_{||}空白となつて、この小説に呼び招かれていることは重要である。つまり、この『ジョージが射殺した猪』という小説における「日本語」は、それ自体決して自然でも必然でもない、便宜的な「言語」として非本質化されているのである。テキスト全体を覆い尽くしながら、しかし、同時に、物語の外部に放擲されるほかないのが、この小説における「日本語」なのである。

こうして読者は、「ジョージ」の混乱した意識の軌跡を読み取りながら、それを表出している「日本語」との関係において、極めて矛盾した位置に投げ込まれることになる。つまり、「ジョージ」という一人の米兵の「内面」をのぞき込むために、小説で書かれた「日本語」を、「ジョージ」の「内面」を過不足無く表現しているはずの文字表記として目で追うしかないのだが、そのとき読者は、今まさに読み進めている「日本語」が、当の「ジョージ」

にとつては決して理解されることのない「他者の言語」であるという矛盾した地点に絶えず引き戻されるのである。語りの透明さが、書かれている内容の真実の保障となるというのが、一般的な小説的方法だとするならば、この小説は、むしろその言葉と内容との一致という幻想を、小説の初めから解体させようとしていると言えるだろう。

しかも、加えて重要なのは、そうした「日本語」をめぐる表記と表記内容（物語）との間の絶対的な距離が、単に「ジョージ」という米兵の出自や帰属に還元されることが無く、この小説に登場する「沖繩人」を含む全ての人物のなかに刻印されているということである。誰にとつても、「日本語」は、虚構的な変換（翻訳）のなかにおいでしか存在しない。こうした言語的葛藤のなかにおいてこそ、この小説は、「日本語」をその内部において、食い破つていこうとするのである。

引用した部分に戻つて、少し詳しくその言語的動態を読み解いてみよう。

引用部の始めにおいて、強姦されたホステスを囲んで沖繩の女たちが「ざわめい」ている。そして、このざわめきを聞きつけ、店の「マスター」は弁償金の「談合」を始めてようとしているのだが、それに一切耳を貸さずに米兵の「ジョン」は、「なんであんなに騒ぐんだ、たかがいたずらぐらいで、敗残の劣等者のくせに」という言葉を吐き捨てバーを出て行く。その背中に向かってマスターの「沖繩方言らしい」「ののしり」が投げつけられるが、そこで主人公は、こうした暴力を被りながらなお、ベトナム帰りの「山男」たちに身体を売り媚びを売るしかない沖繩のホステスたちの存在の矛盾に思いをはせている。

こうした場面展開のなかで、言葉は刻々と変転していく。まず、強姦されたホステスのうめき声とそれを囲む女達の「ざわめき」が、いったい何語によるものかは、この場面には明記されていない以上、それが、日本語なのか沖繩方言なのかは判断することは出来ないし、英語である可能性も残る。その暴力沙汰を金で解決しようと米兵と

「談合」する「マスター」の言葉が英語であるだろうことは容易に予想できるし、金に群がり、騒ぎ立てる沖繩人
たちを「敗残の劣等者」とさげすむ「ジョン」の言葉がやはり英語であるだろうことも推定できるのだが、しかし、
この場面の最後において、マスターが悔し紛れに叫んでいる「ののしり」を「沖繩方言らしい」と推察する「ジョー
ジ」には、その推測の根拠は何もない。この場面においては、実のところ誰が何語を語っているかを弁別する指標
は無いのである。すべての発話は、人種や性や職業・階層といった登場人物の属性によって推測するほかないのだ
が、その推測は実は決定困難である。そうした言語の反秩序的動態を提示するいつけんニートラルな言語として
「日本語」が、この小説を覆い尽くそうとしているかのように見える。しかし、この日本語が、この場面における
言語的な混沌を正しく逐語翻訳的に反映したものとなっているどうかをこの小説のなかで確認すること全く不可能
なのである。たとえば、少なくとも「沖繩人」の言葉は、その属性においてすら、何語で語っているかについては、
決定する根拠はどこにもない。つまり、この小説に登場する「沖繩人」は、他者との関係において、何語を語つて
いるかは実は決定できないのである。

こうした言語の決定不可能性という秩序崩壊から、この小説全体をかううじて守ろうとする防波堤として「日本
語」という表記が用いられていると、ひとまずは言い得るようにも思える。だが、この時、この小説における日本
語は、既に、日本語としての自己同一性を保ち得ていない。というのも、この小説における「日本語」は、それを
母語として語る存在を一切排除しつつ、同時に、それがはたして正しく登場人物の英語なり沖繩方言なりの翻訳に
なっているかどうかは判断できず、意味伝達の役割を果たしているかどうか立証できない「借り物」に過ぎないか
らである。この日本語の同一性の解体という出来事は、特に、沖繩方言との関係において明白なものとなってくる。
と言うのも、登場人物のなかの「沖繩人」が語る沖繩方言について言えば、それに対応する「日本語」は全く示さ

れておらず、ただ「ざわめき」や「ののしり」として意味をなさないノイズとしてのみそれを提示するしかないからである。つまり、沖縄方言を日本語の内部に取り込みこれにしかるべき翻訳を施し、日本語の秩序のなかにこれを位置づけることができないのである。このとき日本語は、他の言語との比較可能性を奪われ、ただそこに「他者の言語」として投げ出されていると言うべきであろう。この場面を読む時、そこに浮上してくるのは、小説で提示されている全てを再現しているはずの「日本語」の、奇妙なまでの虚構性なのである。

こうした物語レベルにおける言語的反秩序性と、これを統一的に表示しようとする「日本語」の表記レベルにおける葛藤は、自ずと、この小説における言語的階層性を解体の危機に直面させる。こうした混乱を別の言葉で言うなら、この小説は、日本語という言語を、まるで外国人が語る外国のように引用してこれを表記しているのであり、ここにおける日本語は、いかなる点においても模写（ミメーシス）的な位相にはあり得ないいわば便宜的手段としてのみそこに提示されているのである。引用の徴を消去された形で、何者によつて翻訳されたか知りようのない痕跡としてのみ、この小説においては「日本語」が根拠無く提示されている。つまり、この小説においては、日本語が用いられれば用いられるほど、その日本語は、国民国家的同一性の言語的象徴としての「母語」あるいは「国語」としての「日本語」の秩序から遠ざかり、そして同時に、その同一性という秩序を打ち破っていくばかりなのである。

3 戦争のなかの日本語

こうした言語的葛藤を考えていく時、この小説が極めて、奇妙なディスコミュニケーションによつてなりたっていることが理解されてくる。つまり、互いが互いを理解し合えるという前提が、この小説では失われているのであ

る。相手が語っている言葉を理解することができず、また、自分が語る言葉が相手に理解されることもないという
共約不可能な場に投げ込まれているのが、この小説の全ての登場人物たちであり、その点で言えば、彼らは、言葉
の戦争とも言うべき闘争関係のなかで、敵か味方が分からない「他者」の不可知性に晒されていると言うべきであ
る。

言語の戦争として現れてくる他者の不可知性について、この小説は、最後の場面で、極めて示唆的な展開を見せ
て、私たちに、「戦後」東アジアにおける、日本という国民国家の政治的位置についての省察を促そうとしている。

動かず、ジョージの小さい動きもみのがすまいと注意深く目をこらしているらしい黒い固まりと八、九メー
トルのへだたりがある。にらみ負けてはならない。ジョージは目をこらした。顔がこわばった。よそのめと
いうあの目。俺は知っている。そんな目でみるな。あんたたちがそんな目でみないでも俺はこんな所にいたく
ないんだよ、しかたなくいるんだよ。どうしようもないんだよ。ジョージはわめきちらしたい衝動をおさえた。
あんたに俺をそんな目で見る資格はないよ。汚いキャバレーのホステスの親だろ、あの女たちはよくしゃべ
り、笑うし、あんたは無口だが、目がちがわらないんだ。俺はだぶだぶのアロハシャツに隠した後ろポケットか
らマグナム五〇五をぬき、安全装置をはずした。(略)ジョージは思いきり引き金を引いた。轟音が広い空間
に響き、葉莖が飛び出、同時に影ゆつくりうすくまった。しばらく、射撃の反動でジョージの腕がけいれんし
た。ジョージはよろめきながら黒い物体に近づいた。足の力が抜け。もつれ、ジョージは金網にもたれた。笠
をかぶったままなので首がへんてこに曲がり、顔はなおひどくねじれ曲がっている。体はうつぶせになっ
ているが、その窮屈げな顔はジョージを向いている。

ここにおいて、ジョージは、「猪」になぞらえた「沖繩人の老人」と内なる語りかけを試みようとし、そしてその「猪」を射殺するに至る自らの狂気と内的な対話を模索している。しかし、ジョージの言葉は決して発話されることなく、この小説においては「日本語」に覆われていく。だが、重要なことは、テキストを覆うこの「日本語」自体の絶対的非共有性によつてこそ、「ジョージ」と「猿のような顔」をした沖繩の「老人」は、完全に隔てられ、そして同時に敵対的な関係のなかで対峙させられているということである。

「ジョージ」は心のなかでこう叫んでいた。「一体、俺を押し込めているのは誰なのだ、誰のしわざだ、こんな町に、こんな島に」と。また、やはり心の中でこうも呟いている。「あんたたちがそんな目でみないでも俺はこんな所にいたくないんだよ、しかたなくいるんだよ。どうしようもない」と。

この「ジョージ」の問いかけを個人的な感慨として理解すべきではない。むしろ、ここで「あんたたち」と呼びかけられているのは、「沖繩の老人」であるというより、この小説を読みつつある、日本語を母語とする全ての存在であり、そこで、「ジョージ」の言葉によつて、「あんたたち」の政治性が問われていると言えるだろう。ここにおいて、この小説は、「ジョージ」の生死を握りつつ彼を「沖繩」という島に幽閉している政治力学をこそ厳しく問うのである。「ジョージ」は沖繩という何の縁もない土地でひとりの「老人」と対峙しているのだが、それは、いうまでもなく、サンフランシスコ条約（一九五二年）そして日米安保条約という軍事同盟によつて、沖繩という「占領地」が日本という国家の内なる外部として米軍に差し出され、ベトナム侵攻前線基地となつていっているという政治的現実によつて引き起こされていることに他ならない。ジョージが沖繩の老人を「猪」を殺すように射殺するという出来事を決定し、彼らをそうした不条理な状況に追い込んでいるのは、日本とアメリカの軍事同盟であり、更に言えば、「戦後」東アジア全体を戦争状態に陥れていくパックス・アメリカーナ（Pax Americana）的な覇権力

学と、その軍事的支配に積極的に荷担し、東アジア全体を新植民地主義的拡大のもとに経済的に支配していく日本という国家の覇権力学との癒合に他ならない。換言すれば、この最後の場面に働いてる力学とは、近代以降、沖繩を含めた東アジアをその軍事的経済的支配下においていった日本という国民国家の植民地主義の継続した暴力と、第二次世界大戦後、共産勢力への対抗という名目で東アジア全域を軍事的経済的に支配していくアメリカの対アジア戦略の暴力とが、ともに手を携えて、「本国」の外延を戦線化していく戦争の政治力学そのものということができるだろう。

しかも、このとき重要なのは、日本のベトナム戦争関与は極めて用心深く不可視化され、その軍事的拠点は、「沖繩」という植民地に集約されて、日本国民の関心から遠ざけられたという歴史的過程を想起することである。あたかも、日本はこのベトナム戦争に関与せず、政治軍事的に中立的な立場に在るかの如き隠蔽が、戦後日本において一貫してなされてきた。この隠蔽のなかでこそ、沖繩は軍事的拠点としてアメリカと日本によって、再植民地化されてきたと言える。そして、まさにこの植民地主義暴力の継続の過程のなかにおいてこそ、「ジョージ」もそしてジョージに殺される沖繩の老人も、実は、その生の根拠を奪われていく存在にほかならないのである。

こうした存在を描くに当たって、この小説がその全てが「日本語」で書かれているということの政治性が、ここに至って明らかになってくる。いうまでもなく、ジョージにとっても、そして沖繩の老人にとっても、「日本語」は、それぞれの「母語」でもなければ「国語」でもない。「ジョージ」にとつてそれは得体の知れない騒音のような言語であり、そして沖繩の老人にとつて日本語は植民地主義の歴史において教育された宗主国の言語である。彼らにとつて、言ってみれば「日本語」は「他者の言語」である。しかし、この小説においては、ベトナム戦争という東アジア全体を巻き込んでいく戦争を背景としながら、二人は、この「他者の言語」においておいて繋ぎ止められ、

「沖縄」というベトナムの前線地において出会わねばならない状況に追い込まれているのである。かれらは、まさに彼らを表象する「日本語」によって暴力的に対峙させられそして（殺し—殺される）という殺害事件の当事者たらしめられていると言えるのである。

この時、この小説全体をまるで透明な記号のようにカバーしつつ、「ジョージ」をはじめとする多くの米兵たちと、また様々な「沖縄人」たちを表象する「日本語」の政治性がある矛盾した様態とやかに浮上してくる。つまり、自らの政治性を消去しつつ透明な記号のような役割を果たし、人々の意識から自らをかき消しながら、その実、その言葉の権力性によつて、本来なら出会うこともなかったであろう、アメリカの地方出身の「ジョージ」と極東の小島に過ぎない沖縄で貧しい生活を送っている一人の「老人」を対峙させるこの小説における「日本語」が、東アジア全体の戦線化に荷担して自らの安全保障を確保しようとする日本という国家の政治的暴力のアレゴリーとなつて、読み手の前に立ちあらわれてくるということである。

看過してはならないのは、ベトナム戦争下における日本という国家の位置と、この「ジョージが射殺した猪」という小説に於ける「日本語」の位相とが、明らかにアナロジカルな相関をもっているということである。つまり、紛争の当事者間にあつて政治的中立の立場にあるかのような透明性を保ちそのことで軍事的紛争から身を引いているようにみえながら、その実、沖縄という内なる外部を保持することによつて、ベトナム戦争そのものに深く関与しそこから軍事的経済的利益を得ようとする日本という国家の政治をこそ、この小説のなかの「日本語」は忠実に反映しているのである。自らの姿を消去しつつ、その媒体としての中立性を偽装しつつ、東アジア全体の戦時体制化に深く関与していく日本という国家と在りようと、この小説における日本語の位相は、不可分の関係にある。

その意味でいえば、この小説における「日本語」は、みずからの政治性を逆説的に提示しているという点におい

て、「日本語」という言葉に孕まれている、帝国主義的暴力性を露呈させる契機となつていけると言える。同時にまた、アジアにおける植民地主義の継続という過程における「日本語」の暴力をもそれを読む者に想起させる可能性を持つていえると言えらる。つまりこの小説における「日本語」の相関的形象は、沖縄を植民地支配してきた日本という国家の近代史的位相と、アメリカの東アジアにおける軍事的支配に荷担していく日本という国家の政治性を、同時にあぶり出すことになる。こうした小説的可能性において、「日本語」を非自然化しその言語のもつ歴史的政治性を再審する契機として、又吉栄喜の小説『ジョージが射殺した猪』をとらえることが可能なように思えるのである。

了

二〇〇五年五月三十一日記す

〔付記〕 本論は、二〇〇五年七月二三日、台湾台中市東海大学で催された、国際シンポジウム（台湾・韓国・沖縄）で「日本語」は何をしたのか）において発表された原稿であり、今回本誌掲載にあたっては一切の加筆訂正をしていない。